

世界政治の中の清末中国——特集にあたって

川尻文彦

中国が世界政治のなかに組み込まれたのは何も「近代」にはじまることではない。近年流行りの「グローバル化」について考えても、16世紀以降の大航海時代は西洋と東洋の垣根を取り払い、世界を「一体化」させたといえる。大航海時代の「グローバル化」がもたらしたさまざまな影響、痕跡は今日の日本、中国のいたるところに残っている。

しかし「近代」以降、別の言葉で言えば「帝国主義」時代以降の「グローバル化」が「中国」の歴史にとってこれまでにない意味をもったのは、よく言われるように政治、経済、軍事、文化の面で圧倒的な力をもった「西洋」が「中国」の前に登場したことである。いわゆる「西洋の衝撃」である。この「西洋の衝撃」の前に、中華帝国はそのレゾン・デートル（存在意義）を問われることになり、軍事・科学技術、政教、文化とその価値を否定され、帝国の崩壊へとつながっていったわけである。

この「西洋の衝撃」論は今日では非常に評判の悪いものである。ポール・コーエン氏はその著『知の帝国主義——オリエンタリズムと中国像』（佐藤慎一訳、平凡社）のなかで、「西洋の衝撃—中国の反応」の図式で描く中国近代史がきわめて偏ったものであり、歴史の実相を伝えていない、との批判を提出した。それ以降、ますます中国近代の「内在的」なアプローチを重視しようとする傾向が強まっている。それらの研究が真に「内在的」な理解に到達できているかどうかはさしあたり別であるが。

私の見るところ、近年では「西洋の衝撃」はおろか、「西洋の影響」を探る作業もいささか「時代遅れ」のように思われているようなふしがある。つまりもっとも典型的な「外在的」なもののみられているのである。欧米におけるいわゆる missionary（宣教師）研究の退潮もそのためのようと思われる¹⁾。欧米人、とりわけ欧米の若手研究者にとって英文史料をひたすらめくって中国近代史を研究するのはいささか「かっこ悪い」ことのように映っ

¹⁾「開港場」での洋書や漢訳洋書が中国や日本の「近代」に与えた影響への新しいアプローチ、再評価については、劉建輝（2000）、「近代」は上海からやってくる——幕末維新时期における「情報」ネットワークの形成と展開『武蔵大学総合研究所紀要』第10号。

ているのではないか。

「西洋の衝撃」にさらされた近代中国がいかなる「内在的」な展開を示したのかの解明（小野川自体は当然このような言い方をしていないが）を「政治思想」の分野からつとに1960年代に試みたのが、小野川秀美の『清末政治思想研究』である。同書で、小野川は「洋務」「変法」「革命」の三段階によって清末の政治思想を見る視角を提示し、日本の学界において大きな影響力をもった。小野川は言う。「清末の政治思想は、洋務論・変法論及び革命論の三段階を主軸として形成されている。²⁾」

小野川秀美の議論はたんなる「西洋の衝撃」論や「革命史」観ではない近現代思想史の見取り図を提示していること、康有為、章炳麟、譚嗣同、劉師培らの「頂点思想家」を思想史的文脈のなかに定位していること、「洋務」思想の興起、進化論、無政府主義や戊戌変法の展開過程などの精緻な実証という点では他の追随を許さないものであるといえる。

とはいえ小野川の図式はひとつの「作業仮説」にすぎないわけで近代中国の思想のすべてを説明しつくすことができるわけでもないし、小野川もそのつもりはない。また「洋務」「変法」「革命」などの「概念」は当時の思想家たちが時々に応じて自らの思想を表現する際に適宜、用いたものであり、その当時の思想史的なコンテクストと離れて論じることはいできない。その意味で依然として研究を深める余地はある。

またこれらの「概念」は今日の歴史家たちが当時を遡及して分析する際に用いる「分析概念」でもあることも忘れてはいけない。たとえば「洋務」はそのもっとも典型的な例である。後世の歴史家たちによって「洋務」は「中体西用」的な、皮相な西洋技術の導入に終始したにすぎず、「変法」や「革命」にのりこえられていくニュアンスでも用いられる³⁾。

岡本隆司は、これまでの私たちの「洋務」理解が梁啓超の著作『李鴻章』のバイアスがきわめて濃厚なものであり、李鴻章のおこなった「洋務」の実相を把握できていないと指摘し、おもに外交思想の面から李鴻章自身が残した文献に即し、李鴻章の「洋務」に検討を加えている。

梁啓超の『李鴻章』はもともと『中国四十年来大事記』の名で光緒二十七年（1901年）に単行本として新民叢報社（横浜、上海）から刊行された（後に『飲冰室專集（四）』（1932年）に収録される際に「論李鴻章」と題された）。日本亡命後のものであり、その生涯を通じて「多作」であった梁啓超にとって最初期の歴史著作であり伝記作品である⁴⁾。

『中国四十年来大事記』は「序例」「第一章 緒論」「第二章 李鴻章之位置」「第三章 李

²⁾小野川秀美（1969）、『清末政治思想研究』（みすず書房、3）。

³⁾范文瀾（1955）、『中国近代史（上冊）』等。

⁴⁾以下、梁啓超の文献からの引用は、『梁啓超全集』（全21巻）北京出版社、1999年、による。梁啓超の文献を採録したものとしては、現在のところもっとも全面的なものであり、簡便であることによる。

鴻章未達以前及其時中国之形勢」「第四章 兵家之李鴻章（上）」「第五章 兵家之李鴻章（下）」「第六章 洋務時代之李鴻章」「第七章 中日戦争時代之李鴻章」「第八章 外交家之李鴻章（上）」「第九章 外交家之李鴻章（下）」「第十章 投閑時代之李鴻章」「第十一章 李鴻章之末路」「第十二章 結論」の構成をとる。李鴻章が亡くなってわずか二ヶ月後、彼の死は当時、日本、中国両国においても少なからぬ反響があったなか（『中国四十年来大事記』にも徳富蘇峰「李鴻章」『国民新聞』明治34年11月10日を転載、収録している）、書きあげられたものであり、およそ5万5000字前後の小作である。おおむね年代順にしたがった叙述になっており、軍事、政治、外交にわたる李鴻章の事跡を丁寧を追ったものであり、19世紀後半以降の史実のひとつひとつについての記述は後世の歴史家が参照するにたるものである。

しかし『中国四十年来大事記』が提示した李鴻章像はきわめて特徴的である。

「李鴻章は才気があるが学識のない人物で、経験は豊富だが情熱のない人物であった」（554頁）あるいは「不学不術でしきたりを破ろうとしないのがその短所である。苦勞を避けず誹謗を恐れないのが、その長所である。」（553頁）といささか情緒的に否定的なトーンの評価が提示されている。

それはなぜか。そのことは、梁啓超がこの『李鴻章』を書いた動機とかかわるように思われるわけであるが、そのことを記す史料は少ない。そのほぼ唯一の史料が『中国四十年来大事記』の直前に記され、後に『飲冰室自由書』に収められる短いエッセイ「二十世紀之新鬼」（1901年）であり、そこで興味ぶかい李鴻章像が語られている。世紀交替期にあたるこの時期、「十九世紀」「二十世紀」などの語は当時の日本の言論界で頻出であり、梁啓超の文章にもそれは反映されている。

「李鴻章は政府に頼ってその富を地位を保ちたい一心だけであった。もし彼が本当に国を強くし、民に利をはかる志しがあれば、どうして四十年間も勲臣、耆宿〔長老〕でありながら、民の望みをつなぎとめ、旧党に打ち勝つことができなかつたのであろうか。」（554頁）

「李鴻章は実に学識もなく、情熱もない人物といえる。だが、中国のような大きな国でも学識と情熱で李鴻章よりまさっている人はどれほどいるであろうか。十九世紀、列国にはみな英雄がいたが、中国だけには一人の英雄もいなかった。そこで私たちはやむをえず鹿を指して馬と言って自分たちを慰め、李鴻章を世界に高くもちあげていう。「この人物は我が国の英雄だ」と。ああ、それもかろうじて我が国の英雄とみなすのみであり、また十九世紀以前の英雄となすのみである。」（554頁）

「国を強く」したり、「民の望みをつなぎとめ」たりすることのない、学識もなく、情熱もない人物、「十九世紀以前の英雄」であるとみなしている。

ここでやや「結論」的に提示された李鴻章像を具体的な史実をまじえて描いたのが、『中国四十年来大事記』である。

そのなかでも「第六章 洋務時代之李鴻章」（副題に「李鴻章が洋務に失敗した理由」）は、「洋務」の語を用いて、李鴻章の中国近代史における位置づけやその功罪をはっきりと書き記したものである。

「洋務」の二字は名詞にはなっていない。しかし、本文の主人公について『李鴻章伝』をあらわすのに、「洋務」の二字で彼の人生の半ばの二十余年の事業を総括しなくてはならない。李鴻章が同時代の俗儒たちに忌み嫌われたのは洋務のためであり、また同時代の鄙夫たちに重用されたのも洋務のためであった。私が彼を重くみるのも、責めるのも、さらに彼を惜しむのもすべて洋務のためである。」(527頁)とする。つまり梁啓超は李鴻章を「洋務」そのものであるとみなし、まさにそれゆえにこそ否定的な評価を李鴻章にかぶせているわけである。

ここでいう「洋務」の内容は、梁啓超によれば、ひとつは「軍事」。つまり船を購入する、機械を購入する、船を造る、機械を造る、砲台を築く、船渠（ドック）を建設する。もうひとつは「商務」であり、鉄道、招商局、織布局、電報局、炭鉱や金鉱を開くなど（528頁）。以上の二点にしばられる。

これらはいずれも「失敗」に終わったと梁啓超は考える。

なぜ「失敗」に終わったのか。その理由には、梁啓超の「洋務」像の根幹にかかわる内容が含まれている。梁啓超自身、「中国の洋務人士のなかで李鴻章ほどの人物はみたことがない。」ともちあげつつも、「李鴻章は真に洋務を知っていたといえるのか」（527頁）と疑問を投げかける。それは、一言で言えば「李鴻章が洋務のあるのを知りながら、国務のあるの知らなかった」のである（527頁）。ここで梁啓超において「洋務」の対義語が「国務」であることが示されている。ここでいう「国」とは「ナショナル（ネーション）」と言い換えてもよい。

また「彼が兵事を知っていたが民政を知らず、外交を知っていたが内政を知らず、朝廷があるのを知っていたが国民があるの知らず、日々他人には大局がわかっていないと批判しながら自分自身は大局を分かっていない」（531頁）こと。「朝廷」と「国民（ネーション）」の対比は「新民説」の論理そのものである（「新民説・論国家思想」）。

また「今日における世界各国の競争は、国家にあるのではなく国民にある」（531頁）ことも指摘している。

たしかに梁啓超が『中国四十年来大事記』で提示した「洋務」像は人口に膾炙し、非常に影響力の大きなものであった。当時の梁啓超思想の文脈から「洋務」を再考する必要がある。やはりそこには「新民説」以降、本格的に展開されるナショナル・ヒストリー、つまり「国民国家（ネーション・ステート）」の論理が貫徹しているように見える⁵⁾。

「新民説」と同じ年、1902年に書かれた、梁啓超「敬告我同業諸君」（『新民叢報』第17号、

⁵⁾ 狭間直樹（1999）、「新民説略論」、『共同研究 梁啓超』みすず書房。

光緒 28 年 10 月 2 日)には興味深い記述がある。「我同業」とは『新民叢報』と「同業」(ジャーナリズム業)の「報館」(新聞社)の関係者という意味である。

梁啓超は言う。「二十年前、西学と聞いて驚いた者は多かった。変法を言う者がでるに及んで、西学に驚かず変法に驚くようになった。十年前、変法と聞いて驚く者は多かった。

(王安石の変法は世にそしられ、数百年來、変法の二字はきわめてよろしくない名詞であった。私は十年前京師でそのような言い方を聞いたように思うが、今では消えて久しい) 民権を言う者が出るに及んで、変法に驚かず民権に驚くようになった。一、二年前、民権を聞いて驚く者は多かった。革命を言う者が出るに及んで、民権に驚かず、革命に驚くようになった。」(970 頁) そしてこれら「西法」「変法」「民権」「革命」は「国民をみちびく〔向導する〕所以である」(970 頁)と梁啓超はいう。

岡本隆司が指摘するように、いわば「洋務」→「変法」→「革命」の三段階論の「原形」がここに提示されている。

ここで注意しなくてはならないのは二点ある。

一つは、「西学」→「変法」→「民権」→「革命」の四段階であること。「西学」が「洋務」のことを指すと考えてよい。ただ「変法」と「革命」の間に「民権」が入っていることに注目すべきである。つまり「民権」が一時期、「西学」「変法」「革命」にならぶような論争的な用語であったことがうかがえるのである。

事実、梁啓超は 1902 年を直前にする時期、しきりに「民権」を唱えている。

「われわれが民権を主張するようになって十年になるが、当局者はこれを憂い、これを嫉(にく)み、これを畏れること、まるで洪水や猛獣のごとくである。」(梁啓超「立憲法議」1901 年) 「民権」の高唱が梁啓超の「急進化」と歩みを一にしている⁶⁾。逆に言えば、そのことがこの当時「民権」反対に転じたその師康有為との「分岐」を生じたともいえる。

「民権」はいわば「急進化」する梁啓超を象徴していた。その中で表出する「洋務」。

もうひとつは「国民をみちびく」という観点である。

「ここでいう国民をみちびくとはどういうことであるか? 西洋の学者が言うには、「報館とは現代の史記である。」ゆえにこの仕事を治める者は史家の精神がなくてはならない。史家の精神とは何か? 既往をかながみ、将来を示し、国民を進化の途へと導くものである。ゆえに史家は主観、客観の二界がなくてはならない。(卷三十四《新史学・史学之界説》)」

(970 頁)と同じ「敬告我同業諸君」で述べる。「新民説」や「新史学」の論理とも共通するが、この当時の梁啓超にとっては「国民」=「新民」を創出することが急務であり、「民権」や「革命」はそのスローガンでもあったのである。そのなかでも「洋務」は当時の梁啓超にとって「乗り越えられていく」べきスローガンであったのである。

⁶⁾『梁啓超年譜長編』上海人民出版社, pp. 301 - 302. 光緒 28 年 11 月, 黄公度〔遵憲〕「新民師函丈書あて書簡」。黄遵憲は梁啓超の「新民説」にみられる「急進化」に危惧を表明している。

以上の論述を通じて、戊戌政変（1898年）で中国を追われた「変法」派の梁啓超が「変法」の前段階である「洋務」を「批判」する意味で、梁啓超に都合のよいように「洋務」を表象したというのはあまりに単純な理解であることがわかる。そもそもこの時期の梁啓超は「変法」派ではないのである。

「新民説」時期の梁啓超の言説を、「中国」の *global history*——「世界政治」あるいは「民族帝国主義」（梁啓超の造語）の「世界」への参入という観点から理解するならば⁷⁾、まさしく梁啓超の「洋務」という概念、そして「洋務」「変法」「革命」なる図式さえもそのプロセスのなかで生み出されたものであるといえる。

その後の中国がいかにかこの「世界政治」の中に巻き込まれていったのか、この特集の諸論考が大きな示唆を与えてくれることであろう。私自身も多くのことを学びたいと思っている。

（かわじり ふみひこ・帝塚山学院大学）

⁷⁾ Tang Xiaobing, *Global space and the nationalist discourse of modernity: the historical thinking of Liang Qichao*, Stanford University Press, 1996.